

## 創造的な学びのある中学校特別活動（学級活動）の在り方

土屋 雅 宏 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

川上 慎一郎 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

眞 邊 剛 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

入江 将 紀 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

### Research on classroom activities with creative learning in the Junior High School

TSUCHIYA Masahiro・KAWAKAMI Shinichiro・MANABE Go・IRIE Masanori

キーワード：中学校学級活動、話し合い活動、学びのプロセス、システム思考、氷山モデル

#### 1. はじめに

平成28年3月に新学習指導要領が告示され、特別活動において育成すべき資質・能力の視点を「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つに整理された。加えて、特別活動の特質に応じ育まれる見方・考え方が明確化された。また、文部科学省（2016）は、具体的に中学校特別活動における育成すべき資質・能力を表1のように整理している。

表1 中学校特別活動における育成すべき三つの資質・能力

個別の知識・技能 「何を理解しているか、 何ができるか」	思考力・判断力・表現力等 「理解していること・できること をどう使うか」	学びに向かう力、人間性等 「どのように社会・世界と関わり、よりよい 人生を送るか」
多様な他者と協働する 様々な集団活動の意義や、 そうした実践を する上で必要となることを 理解し、技能を身に付けている。	所属する様々な集団や自己の生活 上の課題を見だし、その解決 のために話し合い、合意形成を 図ったり、意思決定したり、人間 関係をよりよく構築したりする ために、思考・判断・表現して いる。	自主的・実践的な集団活動を通 して身に付けたことを生かし、 人間関係をよりよく構築しよ うとしたり、集団生活や社会を よりよく形成しようとして いる。人間としての生き方につ いての考えを深め自己実現を 図ろうとしている。

こうした特別活動の特質を踏まえ、各教科等における「見方・考え方」を総合的に活用して問題を発見し、その中で異質な他者と望ましい人間関係を築きつつ、協働して新たな価値を作り出すことである創造的に考える力や考えようとする態度を育む本校の取組を報告したい。

#### 2. 研究の構想

創造的な学びとは、『よりよい考えやものを創り出すために、生徒一人一人が「能動性」と「独自性」を発揮しながら、仲間と「協働」し、問題解決の手がかりを見いだして仮定や仮説を立てたり、様々な角度から考えを拡げて新たな考えを出したり、自分の考えを表現し、検証してよりよいものへまとめる学び』である。そこで特別活動における学びのプロセスを踏まえた上で、各教科等においてこれまでの研究で育まれた見方・考え方を日常生活につながる実践的な場面において、効果的に活用させることにした。つまり、「現状」が「あるべき姿」になることを阻んでいる要因を把握した上で、課題を設定し、他者のアイデアと比較しながら、自分の知識・技能や

経験を組み合わせることで解決し、新たな価値を見出すことであると考へた。具体的には、生徒との寛容で積極的な関わりをもち、その役割を明確にした指導を行うことにした。その上で、学びのプロセスを踏まえた意図的・計画的な指導を適切に行い、生徒の学びと社会とのつながりを常に意識させることにした。加えて、学びのプロセスにおける「解決方法の話合い」の場面で、よりよい人間関係を育むための思考・判断・表現を重視した活発な話合いを充実させる工夫を行うことにした。二つめは、「振り返り」の活動場面において、学校での学びをどのように自己に生かすのかという自己を見つめさせる手立ての工夫を行うことにした。

### 3. 研究の内容

#### 3.1. 寛容で積極的な支援の工夫

特別活動におけるリーダー育成とは、生徒個々のリーダーシップを育成するということである。そのためには、教師自身がリーダーシップをもたなければならないことは言うまでもない。ここでは、教師のリーダーシップを寛容で積極的な支援ができる能力と捉える。

特別活動の教育的な成果は、指導に当たる教師の姿勢が大きく影響するため、学習指導要領の「第4節 特別活動の指導を担当する教師」において留意点がまとめられている。具体的には、学級担任としての心構えや明確な学級経営のための手立てが有効である（鹿兒島県中学校特別活動研究協議会 2012）。その上で、教師は失敗の原因と責任を生徒自身に明確にさせ、環境を整える視点を持ち、「生徒が主役」という立場で失敗から学ばせる指導を行うことで、よりよい人間関係が醸成されることになる。そこで、学級活動の各場面においてリーダー、ファシリテーター、マネージャー、コーチとして教師が以下のような支援を工夫することが考えられる。

目的が明確になっていなかったり、見失われたりした場合、原点に立ち返らせたり、めざすべき姿を再認識させたりするリーダーとして助言を行う必要がある。

また、その目的に至るまでのガードレールを敷くのがファシリテーターの役割である。生徒の状態を表情や雰囲気から感じ、不満げな生徒や発言したい生徒、場に参加できていない生徒などを把握し、安心かつ安全に話合いが行われるように見守り、助言する必要がある。

さらに、個人やグループの意見が全体に反映されなかったり、時間の調整が必要だったりする場合、それらを調整するマネージャーとしての役割が求められる。話合いにおいて不適切な表現の仕方や非建設的な意見が出された場合は、適切に指導するコーチとしての役割が必要となる。

これらに加えて、生徒が日々の振り返りを行うように生活記録を軸とした取組を行い、互いを信頼し合う環境を整えていくことにした。また、チームアクティビティ及びストレスマネジメントといった実践を取り入れ、生徒にリーダーとしてのスキルを身に付けさせることにした。

#### 3.2. 学びのプロセスを重視した学級活動の工夫

学級活動には、「集団としての意思決定を進める自発的・自治的な活動の形態」と「個人として、自己の生き方を選択し行動していく自主的・実践的な活動の形態」がある。新学習指導要領(2017)

では、①学級や学校における生活づくりへの参画、②日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全、③一人一人のキャリア形成と自己実現の三つの内容がある。

①では、「集団の一員であるという自覚と責任感」や「生徒会活動や学校行事への参加や協力」のような題材を用いて、学級の課題解決に向けての議題を決定し、話し合い活動に基づいて集団決定をする。議題の選定や議事進行は、生徒が自発的・自治的に進められるようにする。②、③では、例えば「不安や悩みの解消」や「充実した人生と学習」といったような題材で、生徒が直面する課題の解決に向けて話し合い、自己決定する。活動テーマは、担任の適切な指導の下で、生徒の言葉で表現され、生徒の自主的、実践的な活動を促すことが肝要である。なお、どの学級活動の内容を扱ってもテーマは二つに大別される。一つめは、共同というテーマである。例えば、学級という人間集団に関して、学級内のまとまった意思決定を集団で決定し解決していく展開が挙げられる。二つめは、共通というテーマである。例えば、一人一人の抱える問題の中に存在し、その集団において共通するものであり、生徒一人一人が取り組み、自己の決定を行う展開が挙げられる。そこで、「学びのプロセス」を確立し、各プロセスの意義を明確にした（表2）。

表2 本校における学びのプロセス

① 問題の発見・確認 学級や学校におけるめざすべき姿と比較して、集団生活上の諸問題に気づき、その中から議題や課題を決定・確認し、話し合いの計画を立て、解決に向けて自分の考えをもつ。
② 解決方法の話し合い よりよい生活をつくるための課題の原因やシステム、具体的な解決方法、役割分担などについてグループで話し合う。
③ 解決方法の決定 話し合い活動で具体化された解決方法等の中から、グループや学級全員で合意形成を図ったり、個人で意思決定したりする。
④ 決めたことの実践 決定した解決方法や活動内容について責任をもって全員で実践する。
⑤ 振り返り 話し合いや実践を振り返り、意識化を図るとともに、結果を分析し次の課題解決に生かす。また、実践の継続や新たな課題の発見につなげる。
次の課題解決へ

表3 取り扱う内容による指導計画の流れ（表2の①～⑤に対応）

	事前	本時	事後
パターン1	①	②③	④⑤
パターン2	①②	②③④⑤	④⑤

本時を学級活動の授業とし、事前と事後の活動を含めると、表3のような指導計画の流れのパターンが考えられる。パターン1では、主に学級や学校における生活づくりへの参画や一人一人のキャリア形成と自己実現に関する内容を取り扱うことにした。パターン2では、日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全に関する内容を取り扱うことにした。また、図1の「話し合いのプロセス」を設定して話し合い活動を行った。

1 話し合いのテーマを理解する。 ↓	5 相互に意見交換や質問をし合い、多様な意見等を比較・検討する。 ↓
2 テーマについて自分の考えをもつ。 ↓	6 自分や集団の考えを見直し、深める。 ↓
3 考えや意見を発表する。 ↓	7 集団では合意形成を行ったり、自己の意思決定を行ったりする。
4 他者の意見を聞く。	

図1 話し合いのプロセス

3.3. 思考・判断・表現を重点化した活発な話し合いを促す指導の工夫

生徒の思考を拡大、深化させるという特長をもった「システム思考」に注目した (Donella H. Meadows 2015)。授業設計や話し合いの思考ツールとして利用させることが有効であると考えた。この「システム思考」とは、ものごとを一連の要素のつながりとして捉え、そのつながりの質や相互作用に着目する「ものの見方」である。主に、全体最適化や複雑な問題解決への手法としても応用されるものである。この思考ツールとして「システム思考」を特別活動における問題に対して応用することで、一面的な見方を避け、安易な解法に頼ることなく根本的な問題解決方法を導き出すことになると考えた。また、田口ほか (2015) による「冰山モデル」と併用する手法を取り入れることで効果を高めることにした。このことにより、出来事の根本的な解決を促し、より深い階層部分に働きかけることができると考える。

段 階	内 容
① 〈できごと〉	どのようなことが実際に起こったのか、出来事について様々な視点・立場から考えたり、メリット・デメリットを考えたりする。
② 〈時間による変化〉	時間軸に着目して今起きている問題の前にはどのようなことが起きていたか、その課題の後にはどのようなことが起きそうであるかを考える。
③ 〈つながりと構造〉	問題をシステムとして捉えるために、どのようにつながっているか、ループになっていないかについて考える。そして、最も効率のかつ効果的に課題解決するためにはどうしたらよいかを考える。
④ 〈価値観〉	それらがどのような信念や価値観であるかを考える。この段階においては「ダブルループ学習」を意識させることにした。

図2 冰山モデルカードと話し合いの4段階

「冰山モデル」とは、目に見えるできごとは、何の理由もなく生じているものではなく、様々な因果関係のつながりの中で生じているという事実を冰山に例えて表現しているものである。具体的には、課題に関する諸々の事柄を「見えているもの」(できごと)と「見えていないもの」(時間的な変化や影響、その事柄に対する思いなど)に大別して捉える。さらに、後者に関しては〈時間による変化〉、〈つながりと構造〉、〈価値観〉といった三つの段階に分ける。このように〈できごと〉と合わせて四つの段階で物事を捉えることによって、構造的に課題を把握することできると考えた。この「システム思考」及び「冰山モデル」を次に示す二つの場面で活用することにし

た。第一に指導者における授業設計の場面である。生徒の課題を「システム」として捉え、「冰山モデル」を基に各段階における主な発問をまとめ、整理することにした。次に、生徒による話し合いの場面である。生徒自身が活用することによって思考を可視化し、互いに考えを共有し、協働による創造的な学習活動を各教科で往還的に活用できると考えた。具体的には話し合い活動を4段階で焦点化した。このことによって、自己、他者、社会という視点から、時間軸を変え、構造として捉えることで、よりよい集団や自己の意思決定をする話し合いを促すことにした。図3は、「自学自習を充実させるためにはどうしたらよいか」という議題で話し合い活動を行った際に生徒が記入したワークシートである。図2の4段階と①～④が対応している。この話し合い活動によって、最終的に学級での解決策は「教科連絡を徹底する」という集団決定をするに至った。さらに、④の段階では、そもそも「自習という概念をなくす」ことも導き出された。

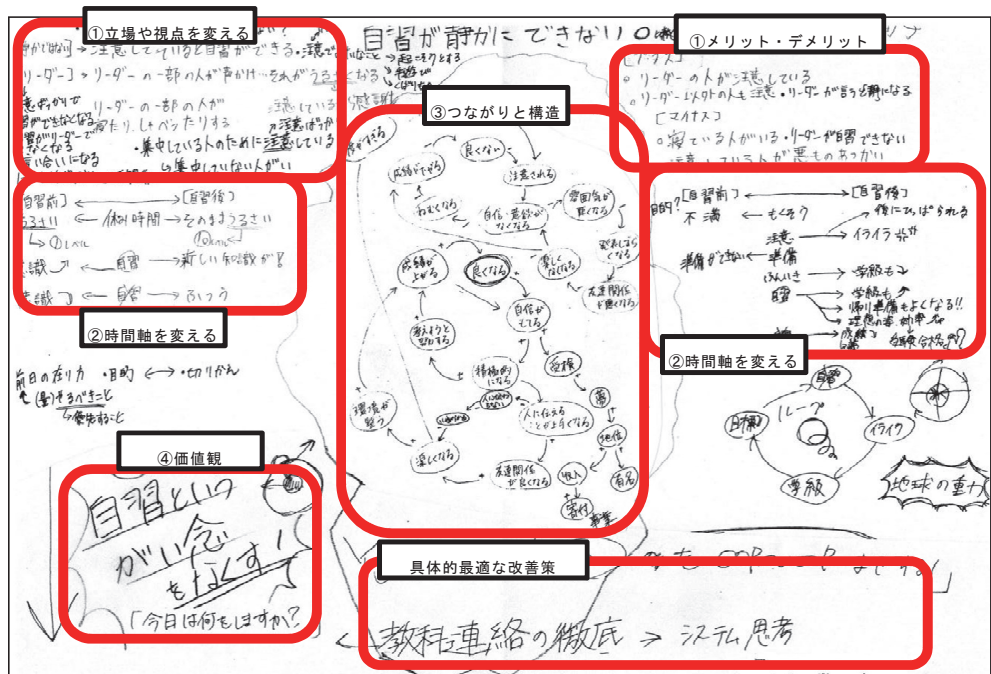


図3 話し合い活動における生徒のワークシート

### 3.4. リフレクションの効果的活用

リフレクション (Reflection) とは、振り返り、内省、省察のことであり、「現実の中で何が起きているかを捉えること」である。具体的には、過去の経験や既にもっている知識を関連付けて、次につなげていくことである。経験したことをこれまでの他の経験と結び付け、自分にとっての意味を考え、自らに必要な行動を考えるプロセスそのものである。ここでは、体験したこととこれまでの経験から関連を発見して連続的になるようにする意図的な活動がリフレクションであると捉えた。そこで、学習を結果でなくプロセスとして捉え、経験の解釈を重要視する Kolb 氏の経験学習モデルを参考にした。また、和栗 (2010) は、何を (what?)、だから何/なぜ (so what?)、ゆえに何/どうする (now what?) という「振



り返りの3ステップ」と「生徒自身の」を強調した発問を「振り返り」の場面で行うことが、生徒自らが既にもっている知識や経験、価値観などを引き出すために効果的であるといっている(和栗 2010)。具体的には、「生徒自身の」を強調した設問として、「今日学んだことで最も印象に残ったことは何ですか?それはなぜですか?その学びをあなた自身は今後どのように活用したいですか?」や、「今日学んだことは、あなた自身の人生にどう関わってきますか?もし直接的に関わらないように思えたとしても何かしらの関わりをひねり出して書いてみてください。」などが挙げられる。このように「リフレクション」をより機能させていくためには、目的を明確にし、仮説をもって行動すること、そして、何がうまくいったのか、何がうまくいかなかったのか、その経験から何を学んだのか、何を得たのかを学ばせることで抽象的な概念化をさせることが大切である。加えて、その振り返りに客観性をもたせることも有効である。そこで、授業や話合いの後には必ずフィードバックする機会を設定することにした。このことで、生徒はこれまでである考えが広がったり、深まったりしていることを意識し、新しい考えやものを創り出していることを意識できるため、独自性が高まることにもつながると考えた。他にも、これまで行ってきた取組である生活記録や学校行事前後の振り返りの作文などを学級活動に用いたり、授業の学びを振り返ったりして、感じ考えたことを書かせるなどの実践を継続することにした。

#### 4. 研究の実際

##### 4.1. 第1学年学級活動の実践 「かかわりをよくするための解決策を考えよう」

##### 4.2. 題材(テーマ)における指導目標

- (1) 自己課題を設定し、解決方法を意欲的に追究し、相互理解しようとする態度を養う。
- (2) 問題解決の方法を多様に考え、ポイントを見だし、実践することができるようにする。
- (3) 人間関係の問題を解決するには、問題を明らかにし、多くの解決方法を考え、結果を予想し、最もよい方法を決定し、実行することが大切であることを理解することができるようにする。

##### 4.3. 評価の観点と本実践における評価規準

生活や人間関係をよりよくするための知識・技能	集団の一員としての話合い活動や実践活動を通じた思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
充実した集団生活を築くことの意義や、学級や学校の生活づくりへの参画の仕方、学級集団としての意見をまとめる話合い活動の方法などについて理解している。	学級や学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、他生徒の意見を尊重しながら、よりよい集団生活などについて考えて表現し、判断した上で、信頼し合って実践している。	学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心を持ち、他の生徒と協力して、自主的、実践的によりよい集団生活を築こうとしている。

##### 4.4. 展開の過程

##### (1) 事前の指導と生徒の活動

期日	活動の場	活動内容	指導上の留意点	めざす生徒の姿
11/9	MT 全員	事前アンケートに回答する。	学級目標を達成するため、「学級生活振り返りアンケート」「アサーションチェック」に回答させ、自分自身や学級の実態を考えさせる。	学級での自分の思いや様子を真剣に振り返っている。
11/10	放課後学級運営委員会	アンケートを集計する。	アンケート集計を行い、学級の実態を把握させ、役割分担を行わせる。また、生徒と協力し、VTR作成を行う。	アンケート結果からクラスの実態を把握している。

12/7	学級活動 全員	目標を確認する。 「最高の学級」のイメージを具体的に描く。	「朝、学校に来たら、『最高の学級』になっていた。どようになっていたら『最高の学級』だと感じるか。」についてイメージを発表させ、共有させる。「最高の学級」が山の頂上だとすると、今何合目まで登っているか。後一合登っているとすると何ができるようになっているか。」という質問から、自学自習時の学級の問題をシステム思考で解決策を見いださせる。	学級目標を基に、最高の学級を具体的にイメージしている。 自習の時間を充実するための最適な改善策を見付けようとしている。
12/9	学級活動 全員	自己課題の設定  アサーションについて理解する。	アンケート結果から自己課題を設定させ、設定した場面（清掃時間に遅れてきた場合）における主張（A）、非主張（B）の二つのモデルの問題点をシステム思考に基づいた冰山モデルを用いて考えさせる。アサーティブな表現のモデリングを行い、日常生活の中でアサーティブな表現を実践していくことを確認させる。	「最高の学級」について意見を出している。よりよい人間関係にするために、アサーティブな表現について理解し実践しようとしている。

(2) 本時の指導と生徒の活動

ア 題材 「自分と友達を大切にしたい主張ができる方法を考えよう」

イ 本時のねらい

ロールプレイや意見交流を通して、話し合い活動を行い、アサーションのポイントを見付け、実際に表現できる。

ウ 展開

過程	活動の内容	指導上の留意点	めざす生徒の姿
活動の開始 6分	1 前時の授業内容を振り返る。 (全体)	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時に学習したアサーションをその後の生活で実践できたか振り返らせる。</li> <li>自分も攻撃的な主張をしている時がある。</li> <li>自分の考えをうまく言えない時もある。</li> <li>求められる人物像や若者の「人間関係」についての現状等のグラフと、自分の現状とを関連させて課題を発見・確認させる。</li> <li>どうしたら自分の考えをうまく相手に伝えることができるだろう。</li> </ul>	◎ 本時の話し合い活動の意義を理解し、課題を見いだしている。
	2 社会の実態を知り、課題を確認する。 (全体)		
	3 課題を設定する。(個・全体)  よりよい人間関係を築くために、どのように伝え合えばよいのだろうか。		
活動の展開 34分	4 場面を理解し、再現VTRを視聴する。(全体)  今週、当直当番のあなた。今日は下校後に予定があり、早く帰りたい。放課後、当直の仕事を急いで行っていたとき、さつききれいに並べたばかりの机に、教室を出ていこうとしているCさんのカバンがあたり、机の位置がずれてしまいました。Cさんは最近、放課後に残っていることが多く、前にもそういうことがあったのでイライラしてしまいました。その時、あなたはどのように伝えますか？	<ul style="list-style-type: none"> <li>身近な学校生活の中から取り上げ、自分の課題として考えさせる。</li> </ul>	◎ 本時の話し合い活動の意義を理解し、進んで活動しようとしている。
	5 本時の場面設定におけるアサーティブな表現(台詞)を考え、ペアで共有する。(個・ペア)  自分：「わざとじゃないだろうけど、ぶつかってずれた机を元に戻してもらえます？」 相手：「あつ、ごめんなさい。」 自分：「ありがとう。気をつけて帰ってね。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>学級の現状を踏まえた場面を提示し、アサーティブな表現を個人で考えさせる。</li> <li>生徒にアサーティブな表現のよさを感じ</li> </ul>	◎ 他の生徒の意見を尊重して考え、自分の意見を適切に表現している。
	6 考えた台詞が、本当に自分と相手の気持ちを大事にした、アサーティブな表現になっているか再考し、練り上げる。(個・グループ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己課題を解決しようとしている表現になっているかを考えさせる。</li> <li>目に見えない部分(相手の立場・時間軸で考えているか)をシステム思考(冰山モデル)で用いたVTRで整理させる。</li> </ul>	◎ 最重要ポイントをおさえている。
	7 個人で考えた表現でロールプレイを繰り返し実践し、互いの表現について感想・アドバイスを伝える。(グループ)  自分：「今、机がずれちゃったんだよね。いつも放課後残ってるけど、何かあるの？」 相手：「実は部活動で友達とケンカをしてしまった。」 自分：「そうなんだ。それはつらいね。私に何かできることはある？」 相手：「うん。大丈夫。」 自分：「そう。私も今日は急いでで当直の仕事早く済ませたいんだ。だから、机と一緒に戻してくれない？」 相手：「ごめん。気付かなかった。僕が戻すよ。」 自分：「ありがとう。友達と早く仲直りできるといいね。さようなら。」	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の気持ちを大事にした上で、自分の気持ちもしっかり表現することが最重要ポイントであることをおさえる。</li> </ul>	◎ アサーティブなやりとりが表現できている。

活動のまとめ 10分	8	学んだことを振り返り、実践に向けての意欲をワークシートに記入する。(個)	・ 実際に起こっていることの中で最も大切なものは何かを考えさせ、ワークシートに記入させる。	◎ 意欲的に実行しようとしている。
	9	次の時間について予告する。(全体)	・ 主体的な活動を呼びかけ、これからの生活で実践し、生活記録に貼付するシートに記入していくことを伝える。	

### (3) 事後の活動と生徒の活動

期日	活動の場	指導上の留意点	めざす生徒の姿
随時	各学級 全員	本時の学びを実践させ、生活記録に振り返りをさせる。	実践して、その有用性を実感し人間関係を築いている。
12/20	各学級 全員	アサーティブな表現を紹介し合うための「きらきらカード」への記入を行わせる。	成果と課題を具体的に記入し、次の活動に生かしている。

## 4.5. 考察

### (1) 思考・判断・表現を重点化した活発な話し合いを促すための工夫

本授業では、アンケートの結果から、実際にこの学級でよく起きている場面をVTR化し、生徒たちに視聴させた。4フレームにおける場面設定は「今週、当直当番のあなた。今日は下校後に予定があり、早く帰りたい。放課後、当直の仕事を急いで行っていたとき、さっききれいに並べたばかりの机に、教室を出ていこうとしているCさんのカバンがあたり、机の位置がずれてしまいました。Cさんは最近、放課後に残っていることが多く、前にもそういうことがあったのでイライラしてしまいました。その時、あなたはどのように伝えますか？」である。

視聴後、場面設定におけるアサーティブな表現（セリフ）を生徒に考えさせ、考えた表現をペアでロールプレイし、自己課題を解決しようとしているかアドバイスする活動を行った。そこで生徒が考えたセリフは、すぐに椅子を元に戻すように、やさしくお願いする表現にとどまっていた。そこで「考えたセリフは本当にアサーティブな表現なのか。双方向での思いを伝え合うコミュニケーションなのか」ということを再考させるために、Aさん側から時間軸をずらして考えられるVTR②を視聴させた。VTR②からAさんが、友人関係で悩んでいることや、部活動に行きたがっていないという状況を読み取らせ、構造としてつながりをもったものとして考えさせた。すると、生徒は最初に考えたやりとりが自分の要求のみであり、相手の立場に立ったアサーティブな表現ではないことに気付き、表現の修正を行った。VTR②を見せる前の大切にしなければいけないことは、「自分の要求を伝えること」、「机の位置を元にもどしてもらうこと。」だったことに対し、VTR②を見せた後は、「まず相手のことを思いやる」、「相手の状況を確認する」ことを大切にされた表現に変容が見られた。

### (2) リフレクションの効果的活用

図4は、活動の展開6と8における生徒のワークシートである。生徒が何度も実践を行い、書き直しているワークシートの記述である。生徒が何度もアサーティブな表現を追究できるようにペアを変えるたびにリフレクションの時間を設定した。生徒は、実践を繰り返し、フィードバックするごとに、具体的な表現に変化が見られ、表現する際、大切にされたことの項目で質



の高まりが見られた。また、活動のまとめ8の際、「これまでの学びで大事だと思うことを書いてください。またこの学びがこれからの生活のどのような場面で生かしていきたいか書いてください。」という発問をして、振り返りを行った。このことにより、生徒自らが既にもっている知識やこれまでの体験、価値観などを踏まえたリフレクションが起こっていることにつながったと考えられる。さらに、生徒が自己課題を踏まえて、どのように表現していくことが重要かに気付き、次の課題を明確にして実践していく態度が見られた。

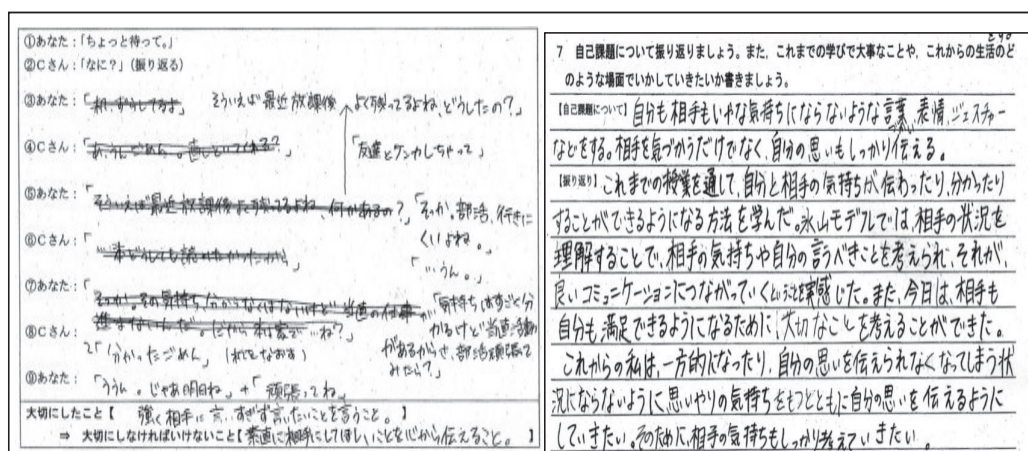


図4 活動の展開6と8における生徒のワークシート

## 5. 成果と課題

### 5.1. 成果

学びのプロセスや、社会とのつながりを意識させ、自己課題を設定させる教材の工夫を行うことで、目的が明確になり、能動性を発揮する生徒の姿が見られた。また、システム思考に基づいた氷山モデルを用いた手立ての工夫を行うことにより、思考・判断・表現を重視した活発な話し合い活動につながった。特に、解決方法の決定において、つながりや構造を意識した考えの掘がりと深まりが見られた。さらに、振り返りの場面で、リフレクションを活用することにより、学んだことを学習の場から離れた場面で発揮しようとする生徒が増え、独自性を発揮する生徒の姿が見られた。

### 5.2. 課題

本研究においては、学級活動について具体的な手立てを工夫してきた。しかしながら、学校行事や生徒会活動との関連も深いため、教科の研究に加えて、道徳・特別活動の領域まで行った5年間の研究を整理し、教育課程に反映させていく必要があると考える。また、各教科等における「見方・考え方」を総合的に活用できるように、カリキュラムマネジメントを行うことにより、学級活動の更なる充実につながると考える。

## 付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属中学校平成28年度の研究紀要で発表した研究内容等に基づき、特別活動（学級活動）において研究を更に発展させ、その研究成果をまとめたものである。

## 参考文献

- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（2016），特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）
- 文部科学省（2017），中学校学習指導要領解説特別活動編
- 鹿児島県中学校特別活動研究協議会（2012），学級担任これさえあれば3！，朝日印刷
- Donella H. Meadows（2015），システム思考をはじめよう，英治出版
- 内田有亮・西本彰文・田口浩嗣（2015），計測・制御におけるシステム思考導入による評価・活用能力の育成，日本産業技術教育学会九州支部論文集 pp.69-76
- 和栗 百恵（2010），「振り返り」と学習，国立教育政策研究所紀要 第139集，国立教育政策研究所